平成 27 年 4 月
語り部：中山　厚

今から７０年前に松山の街が焼け野原となった。アメリカの爆撃機による空襲によるものだった。日本はアメリカやイギリス、フランス、ロシア、中国などと戦った。

私が生まれたのが１９３３年の昭和８年である。当時は覇権主義で、列強国と言われるアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ロシアなどの国々がアフリカなどの弱い国を占領して競っていた時代だった。日本も朝鮮や台湾などを領土にしていた。また、満州にも大勢の開拓団を送り、街を造り、学校を造り、鉄道を敷いたり、輝く国をつくろうと頑張っていた。「大東亜共栄圏」といって、アジアの南方まで栄えた地域をつくろうとしていた。

私が４歳の昭和１２年に日中の国境付近の盧溝橋（ろこうきょう）で争いが起き、日中戦争が始まった。私が小学校にあがった頃、ヨーロッパでも戦争が起きていた。第二次世界大戦の始まりである。第二次世界大戦は、まずドイツとポーランドが戦争を始めた。ポーランドと仲の良かったイギリス、フランスがドイツと戦争を行った。その前に、１９１４年から５年ほど第一次世界大戦があった。イギリス・フランス対ドイツ・オーストリアが戦い始めたのが第一次世界大戦で、初めて飛行機や戦車が使われた。終結して、約２０年後に第二次世界大戦が起こった。第二次世界大戦は、兵器も格段に進歩し、ものすごい戦争となった。

アジアでは、日本が中国と戦争を始めたが、当時、中国はアメリカと仲が良かったので、アメリカから日本に戦争から手を引くよう迫られたが、耳を貸さずドイツ、イタリアと「日独伊三国同盟」を結んだ。アメリカなどから経済的圧力がかけられ、昭和１６年の１２月にハワイの真珠湾に集結していた敵の艦隊に奇襲攻撃を仕掛けた。それが太平洋戦争の始まりだった。小学校３年生の教室でラジオ放送を聞いた。「大本営発表。我が帝国陸海軍は、８日未明、西太平洋上において米英と戦闘状態に入れり。」と勇ましい軍艦マーチとともに流れてきた。一気に様子が変わった。

日本人はみんな戦争に負けるとは思っていなかった。一度戦争へと立ち上がってしまうと、ブレーキの利かない自動車が坂道を転がっていくかのように歯止めがきかない状況となっていった。

堀之内の電車通りの１つ南の通り、今の三番町６丁目辺りに私の家があった。静かな街で、みんな仲が良かった。当時は、車もなく馬車が行き交っていた。戦争が始まると街並みが変わった。連日のように出征兵士を見送る会を行っていた。婦人会は毎日千人針を縫っていた。

初めの半年は、日本が破竹の勢いで勝ち上がっていった。南京、香港、フィリピン、南の島々などを占領していった。しかし、その勢いも半年ほどしか続かなかった。１９４２年ミッドウェー海戦により、日本は多くの軍艦や飛行機を失った。制空権、制海権を奪われてしまい、海外に出ている日本軍への補給が難しくなっていった。私が小学校５年生ぐらいのときに戦況が悪化したが、当時は負け戦の報道はなかった。

私が小学６年生の昭和１９年には、戦略上の拠点とされたサイパン、グアムが占領された。アメリカはサイパンに飛行場を整備し、爆撃機が日本本土を攻撃できるようになった。それまでは、航空母艦から飛行機が飛んできていた。

昭和１９年１０月に日本は捨て身の戦いを始める。皆さんも聞いたことがある神風特攻隊が片道の燃料を積んだ爆弾で敵に体当たりをした。

昭和２０年になると、日本各地で空襲を受けるようになった。２、３月には東京大空襲があり、大阪や名古屋などの大都市も空襲にあった。松山上空も爆撃機が多く通過していた。４月末にはヒトラーが自殺し、５月にドイツが降伏して、ヨーロッパでの戦争は終わった。しかし、日本はまだ頑張った。４月１日にアメリカが沖縄本土上陸した。沖縄救援のために２，０００人の兵員を乗せた戦艦大和を呉から向かわせたが、九州沖で撃沈された。

５月中頃に松山の上空で敵のグラマン戦闘機と吉田浜から飛んだ戦闘機の空中戦があった。煙を吐きながら墜落していくのを庭から呆然と眺めていた。それから１週間たった後、親のおつかいで田んぼ道を歩いていると、キーンと金属音がしたと思った。次の瞬間、グラマン戦闘機が高度を下げてきた。周りには誰もいなかった。グラマンより機銃掃射を受け、体中の血液が凍りつくぐらいびっくりして、草むらに転げた。幸い、弾に当たらなかった。日本の空は抵抗がなくなり、グラマンは、動くものは遊び半分練習半分で撃ったとも言われている。

武器をつくるために、学校からは銅像が消え、寺からは鐘が消え、各家からは鍋や釜、自転車が兵器の金属になるため供出された。戦況が悪化すると、何軒かおきに用水桶を置き、防火訓練をしたり、広場ではモンペ姿の女性が竹やり訓練をしていた。各家では灯火管制で電球を暗幕で隠し、暗くしていた。また、当時は「欲しがりません、勝つまでは。」という合言葉で、みんなで協力し合っていた。

昭和２０年になり、北予中学に進学した。５年制だったが、３年生以上になると、学徒動員として工場に働きに行っていたので、学校には１，２年生だけだった。私の兄も新居浜の工場に学徒動員で行っていた。学校では、食料増産のために主にイモ作りをしていた。体育の時間は、ほふく前進や手りゅう弾を投げたり、敵兵と遭遇した時のため股を蹴り上げる練習をしたりしていた。警

戒警報や空襲警報が毎日のように鳴り、街の中はどんどん暗くなっていった。

（松山大空襲の話）

昭和２０年７月２６日の夜１０時半ごろ、急にサイレンが鳴り始めて、いっこうに鳴りやまなかった。その日は警戒警報なしで空襲警報が鳴った。しばらくすると、外が騒がしくなった。本町が火事と聞いたので、新居浜の工場から帰っていた兄と様子を見に行った。東の空から不気味な爆音がしてきた。見上げると、何機ものＢ２９が６機編隊で近づいてきていた。大変だと思い、必死で逃げた。家に近づくと、頭の上からヒューッと爆撃の音がしてきた。兄が「飛び込め。」と言ったので、玄関にヘッドスライディングのように飛び込んだ。父は、近所の役で見回りをしていた。兄が「逃げるぞ。」と言ったので、兄と妹と一緒に防空頭巾を被って逃げた。頭の上では、ものすごい爆音と焼夷弾が降っていた。家の前には２歳ぐらいの女の子が裸で泣いていた。照明弾により夜でも明るかったので、女の子がはっきりと見えた。その女の子は母に任せ、急いで逃げた。Ｂ２９は東から爆弾を落としてきたので、西へ南へと逃げた。

（模型と写真で焼夷弾の説明）

中にはドロドロの油脂が詰まっており、地面に落ちると信管が作動し、油脂が飛び散った。Ｂ２９は焼夷弾を３８本の束にして落としてきた。日本の家は木造なので、アメリカによってものすごい数の焼夷弾を落とされた。黒いカラスの大群が急降下で襲ってくるようだった。必死で逃げるしかなかった。

妹は白いシャツを着ていたので、敵に見つかるかもしれないと恐れていた。今の済美高校辺りを逃げた。後は、どこを逃げたのかよく覚えていない。気が付けば、田んぼのあぜ道を走っていた。中には、大声をあげて走り回っている人もいた。途中で溝にはまってしまい、履いていた物が無くなり、裸足だった。石手川の土手に着いて、橋を渡り、街を振り返って見ると、煙で松山の街は何も見えなかった。そこで夜を明かした。

翌朝、松山市内は全滅で、道後が無事と聞き、何かあれば家族と道後で落ちあう約束をしていた。道後へ行く途中、ムシロをかけられた遺体を見た。そして、昼ごろ伊佐爾波神社の下で両親と会うことができとてもうれしかった。

それからの生活が大変だった。学校も焼けて、着る物もなく、食べ物もなく、住む所もなく、何もなかった。隣に住んでいた方の実家が潮見にあったので、その実家の倉庫を借りて生活することになった。

空襲から１０日後、学校の焼け跡整理に行く途中、西の空に大きな雲を見た。学校へ着くと、友人は音や光がしたと聞き、それが広島の原爆だった。広島に原爆を投下された２日後に、ロシアが国境を越えて攻めてきた。大勢の人が殺され、捕虜となった。その翌日には長崎にも原爆を投下された。

松山大空襲では、２８２名近くが亡くなり、８名の方が行方不明と発表があ

ったが、実際には５００名以上の方が亡くなったと言われている。第二次世界大戦により、日本で亡くなったのは３００万人、アメリカは６０万人、ドイツは３００万人、ロシアでは１，０００万を超える人たちが亡くなったと言われている。戦争で亡くなった日本人２１１万４０００人÷戦争の期間２２６日＝一日平均９４００人もの方が殺され続けた。

戦争は、お互いの意地や欲のぶつかり合いだ。戦争に発展させるか、それとも仲良くしていけるかは人間の力だと思う。戦争の悲惨さは体験しないと分からないかもしれないが、今日の話を胸に刻んでもらいたい。今後、平和について真剣に考えていってもらい、正しい判断と行動をしてもらいたい。そして、皆さんには優しさと思いやりのある人になってもらいたい。

質疑応答等（約 10 分）

Ｑ：戦争からどのくらいの期間で普通の生活に戻ったか？

Ａ：２～３年かかった。納屋をかりて、大変な生活をしていた。
３年位経ってようやく、空いている家を借りて、にわとりを飼ったりできるようになった。